

ていると考えられる。二つのケイブシステム共に下流側の洞窟が洞窟としての発達状況が悪いのは、このような状況によるものである。事業実施区域及びその周辺の洞窟群一帯の基盤は、谷地形となり、谷の底に名蔵礫層があり、その上に大浜層の琉球石灰岩が発達しているため、二つのケイブシステム共に同じ場所を吐出口としている。水流の遷移点となるプールより高い部分に発達した洞窟と、それ以下に発達した洞窟の重層構造になっており、二次生成物は上層部分に発達しており、洞窟の規模も大きい。

琉球石灰岩（大浜層）の特徴として砂層をレンズ状に挟むことが知られており、一般的にはこの砂層が抜け出し洞窟を形成している。AケイブシステムのD洞はこのタイプである。しかし、BCEケイブシステムのE洞は大浜層の砂層ではなく、名蔵礫層に発達しており、洞窟に見える砂層は長さ300m近くある。事業実施区域及びその周辺の洞窟群の水流のある洞窟は、ほぼ重層型となっているが、際立っているわけではない。水流のある重層型の洞窟には流礫層が発達するが、二つのケイブシステムにも多くの流礫層があり、フローストンに覆われた流礫棚が発達している。また、事業実施区域及びその周辺の洞窟群のケイブシステムの流礫層は、石灰岩と同時に多くの片岩を含むのが特徴である。

洞窟が完全水没するほどの水流があると、天井にベルホールを形成することがあり、石垣島の洞窟ではあちこちに見られる。このケイブシステムでも、B洞で形の良いベルホールがある。また、A1洞でも未発達ながら見ることができる。

(ウ) 洞窟群の鍾乳石

事業実施区域及びその周辺の洞窟群の中で、鍾乳石の最も発達しているのはB洞で、つらら石、石筍、石柱、ストロー、ケイブバブル、フローストン、リムストーン、洞窟サンゴなど、殆どの鍾乳石がある。石柱の最大のもは長さ2.6m、直径1.8mあり、同型が多数ある。石筍は高さ5.5m、直径0.35mをはじめ多数あり変化に富んでいる（図-6.7.1(5)、図-6.7.1(6)）。つらら石の発達も良く、曲がりくねっているものやカーテン状のものなどがある。奥のホールには、小型ではあるが白色のつらら石が密集しているなど、全体に白色の二次生成物が多く変化にも富んでいる。

次に鍾乳石の発達しているのは、E洞の上層部で、つらら石、石筍（最大：高さ5.5m、直径0.35m）、石柱（最大：長さ2.6m、直径1.8m）がある。E洞で目立つのは、奥のホールのリムストーンダム（巾8m、長さ15m、一段の高さ40cm、20段）である（図-6.7.1(7)）。石柱では、C洞の大石柱が直径6m、高さ10m近くもあり最も大きい（図-6.7.1(6)）。A洞においても、比較的大きなつらら石（カーテン状のつらら石：長さ1.8m、巾0.4m）が発達している（図-6.7.1(5)）。